

二〇二二年五月二四日

カメラ向けられし鹿の子の好奇心
粛々と絹の雨降る柿若葉
窓若葉転勤と告ぐ若き医師
水口を閉めて植田の昏れなんと

もとこ
みづき
菜々々
素秀

二〇二二年五月二三日

子ら集め野外礼拝若葉風
夏空を独り占めせるカフェテラス
ケアハウス窓に広がる麦の秋
ゴム長も鰯も干されし浦の河岸
玻璃窓を打ち破らんと青嵐
失敗のケーキ苺で覆ひけり
赤ちゃんの干し物揺らす若葉風

むべ
たか子
たかを
凡士
なおこ
あひる
みづき

二〇二二年五月二二日

風駆けて波打ちやまぬ若楓
濡れ縁の雨の匂ひや夜の新樹
薫風やネモフィラ越しに水平線
噴水の雲に溶け込むしぶきかな
俺が山くつきり映す植田かな

明日香
宏虎
素秀
ぼんこ
こすもす

二〇二二年五月二一日

白シャツに風を孕みて登校子
S Lの駆け抜けていく麦の秋
園若葉ラジオ体操初参加

素秀
隆松
あひる

味噌蔵の闇の一步に黴匂ふ

素秀

雨の日の風情またよし柿若葉
緑陰にウーバーイーツ待機しぬ

満天
もとこ

二〇二二年五月二〇日

花樟の香の降り注ぐ通学路
黒潮に初鯉追ふ土佐漁師
畳まれて目玉ばかりや鯉幟
釣り堀に肩を並べし親子かな

なつき
素秀
凡士
智恵子

二〇二二年五月九日

賛美歌を歌ふ窓辺に風薫る
コロナ禍に鎖す居酒屋に軒つばめ
ポンポン船土堤埋めつくす除虫菊
溝浚へ終へてはじまる立ち話
母の日の電話は母の叱り声

あひる
もとこ
みきお
満天
素秀

二〇二二年五月八日

足裏に夏の来てゐる渚かな
文字褪せし古碑存問す木下闇
青葉潮へといつせいに
出漁す
梟の子に翻弄されつ朝散歩
春風や見守り隊へ子の笑顔

凡士
明日香
凡士
あひる
満天

毎日句会みゆる選・二〇二二年五月一六日